

令和7年度 会派調査研究報告書

(視察先 1 か所につき 1 枚)

会派名	葎真クラブ		
出席者	宮川文憲・清水康雄・田原一孝・内藤正之・木内吉英・山本京子・石河一郎		
事業名	茨木市文化・子育て複合施設「おにクル」について		
事業区分	①研究研修②調査		

1. 葎崎市での課題と研修・調査の目的

葎崎市にも同様に、図書館や子育て支援施設、商業施設などが入る複合施設「ニコリ」が整備されているが、施設の活用や市民の滞在時間、にぎわいの創出という観点においては、さらなる工夫や検討の余地があると感じている。 茨木市においては、子育て支援、図書館、市民活動、商業、防災といった多機能を一体的に備えた「おにクル」が、市民の憩いと交流の拠点として活用されており、空間設計や運営方針、利用者との関係性づくりにおいて、先進的な工夫が随所に見られる。 本視察では、施設づくりとその運営に関する知見を深めるとともに、葎崎市における公共空間のあり方や、次世代に求められる子育て支援の方向性について学ぶことを目的とした。

2. 実施概要

実施日時	令和7年6月24日（月）16:30～17:30		
視察先	茨木市文化・子育て複合施設「おにクル」		
報告内容	1. 概要		
	茨木市は、大阪府の北摂地域に位置する中核市であり、大阪市と京都市の中間に位置する利便性の高い都市である。人口は約28万人で、ベッドタウンとして発展してきた歴史を持つ一方、近年では「住み続けたいまち」「子育てしやすいまち」としての評価も高まりつつある。 市の南部には商業施設が集積し、北部には豊かな自然環境が広がるなど、都市機能と自然がバランスよく共存している。特に教育や子育て支援に力を入れており、2023年には市民の共創拠点「おにクル（茨木市文化・子育て複合施設）」を開館。市民活動・防災・商業・子育て支援を一体化した新たな公共施設として注目されている。		
	2. 考察（これらの取り組みを葎崎市にどう活かせるか）		
	茨木市の「おにクル」は、子育て支援・図書館・市民活動・防災・商業機能などを一体的に備えた複合施設でありながら、単なる“機能の集合体”ではなく、人の滞在や交流を自然に促す設計と運営の工夫が随所に見られた。特に、親子が自由に過ごせる空間や、木材を活用した温もりある内装、動線や視線に配慮した構造が印象的で、施設全体が「居たくなる空間」としてつくられていた点は、極めて参考になる。 葎崎市にも同様の複合施設「ニコリ」が整備されているが、利用者の滞在時間の短さや世代間の交流の不足など、施設の本来のポテンシャルを十分に活かしていない側面もある。		

今後は、機能をただ並列的に配置するのではなく、空間の“つながり”や人の“動き・滞在・関わり”を意識した設計・運営へのアップデートが求められる。
また、運営においても「市民との共創」や「使いながら育てる施設」という視点が重要であり、茨木市のように市民の声を柔軟に取り入れ、施設そのものを成長させていく姿勢は、今後の荏岐市の公共施設マネジメントにおいても大いに参考となる。

感想（まとめ）

施設を訪れた際、まず驚かされたのはその活気であった。館内には多くの中高生の姿があり、思い思いに過ごす様子が印象的であった。施設の目の前には広々とした公園も整備されており、屋内外の活動が連動するような空間構成となっている。

開館から間もないということもあるかもしれないが、建物全体に新しさと開かれた雰囲気があり、「人が集まりたくなる場所」としての魅力を強く感じた。利用者が自然と集い、滞在し、交流するという空間が公共施設の中で実現されていることは、大きな学びとなった。

今後、荏岐市においても、世代を超えて人が集まり、賑わいが生まれるような公共施設のあり方を引き続き模索していきたいと感じた。

感想（まとめ）
・ 市政に活かせること



※写真等がある場合は添付すること